



Data

監督・脚本：コンスタンチン・ハベンスキー

出演：コンスタンチン・ハベンスキー / クリストファー・ランバート / ミハリーナ・オリシャンスカ / マリヤ・コジェフニコワ / ダイニユス・カズラウスカス / フェリス・ヤンケリ / ファビアン・コチェンツキ / カツベル・オルシェフスキ

👁️👁️ みどころ

ポーランドにはアウシュヴィッツの他5つの“絶滅収容所”があり、その1つがソビボル。そこで起きた“武装蜂起”と“大脱走”とは・・・？

『サウルの息子』(15年)で観たゾンダーコマンドによる死体処理が事実なら、ソビボル収容所でみるゾンダーコマンドも事実。しかし、そこではステイブ・マックイーンら大量のハリウッドスターが出演した『大脱走』(63年)まがいの命がけの脱出計画が・・・。

その“歴史秘話”にはビックリで、しっかり勉強する必要があるが、映画のつくり方としてはイマイチ・・・？



■□■映画は勉強！ソビボル蜂起とは？新たな歴史秘話を！■□■

映画は楽しみ(エンタメ)であると同時に勉強のネタ。とりわけ、私たちが知らなかった歴史上の物語(歴史秘話)を映画ではじめて知ることが、大きな楽しみであると同時に貴重な勉強だ。例えばポーランドのアンジェイ・ワイダ監督の『カティンの森』(07年)(『シネマ24』44頁)ではカティンの森虐殺事件を、エドワード・ズウィック監督の『ディアフィアンス』(08年)(『シネマ22』109頁)ではヒトラーと戦ったユダヤ人3兄弟を、そして『戦場のレクイエム』(07年)(『シネマ34』126頁)では内戦の革命烈士秘話を、それぞれ、はじめて知ることができた。

しかして、『ヒトラーと戦った22日間』と題された本作ではじめて知ることができた歴史秘話は、1943年10月14日にソビボル絶滅収容所で実際に起きた収容者たちの大規模な反乱と脱走事件。詳しい解説はパンフレットにある芝健介(東京女子大学名誉教授)の

REVIEW「ソビボル蜂起と歴史的背景」に書かれているので、それをしっかり勉強してもらいたい。第二次世界大戦下でナチス・ドイツがユダヤ人絶滅のためにポーランドに建設した強制収容所ではアウシュヴィッツが有名だが、ポーランドの収容所はそれを合せて6つあり、ソビボルはその1つだ。

スクリーン上では、冒頭に、ソビボル駅に到着した列車からソビボル絶滅収容所に収容される大量のユダヤ人たちが降りてくるシークエンスが登場する。そこでは乗客を出迎える音楽隊の演奏と「ソビボルによろこそ」という明るいアナウンスが繰り返し流されているから、アレレ・・・。さらに、降りてくる乗客たちはみんな元気そうだし、服装もそれなりにきっちりしている。また、それぞれが大きなトランクを持っている。他方、ソビボルを管理するナチス親衛隊曹長カール・フィレンツェル（クリストファー・ランバート）はユダヤ人たちに荷物を預けさせ、手に職を持つ者たちを選び出し、男女をいったん別々にしてシャワーを浴びさせた後は再び家族ごとにする約束をしているから、これもアレレ・・・。彼の声は一見優しくそうだが、さて、その実体は・・・？

■□■主人公は元ソ連兵士。それは一体なぜ？彼はユダヤ人？■□■

本作終盤からクライマックスにかけては、スティーブ・マックイーンをはじめとする、ハリウッドスターが多数出演した『大脱走』（63年）と同じような、不可能に挑戦した「脱走劇」がはじまる。しかし、そこに至るまでは、ソビボル収容所の実態とそこでの屈辱的生き方を余儀なくされるユダヤ人男女の姿が徹底的に描かれる。

本作の主人公で、“大脱走”のリーダーになる男は元ソ連の軍人アレクサンドル・ペチュエルスキー（通称サーシャ）（コンスタンチン・ハベンスキー）。彼はミンスクの収容所での脱走に失敗しながら、なぜか殺されずにこのソビボル収容所に送られてきたらしい。しかし、ロシア人がなぜユダヤ人の収容所に？収容者たちが彼をナチスのスパイではないかと疑ったのは当然だが、そんな彼らに対しサーシャはイチモツを見せて「俺も割札を受けたユダヤ人だ」と説明したが、その後の彼の役割は・・・？

「ヒトラーもの」「アウシュヴィッツもの」でユダヤ人の元ソ連兵士が主人公になる映画を私をはじめ観たが、そこでよく考えてみると、本作はロシア、ドイツ、リトアニア、ポーランド映画だ。主人公のサーシャを演じる俳優も海外で最も知られたロシア人俳優らしいが、さあ本作にみる彼の熱演は・・・？

■□■実に不謹慎ながら本作では三人の美女にも注目！■□■

他方、実に不謹慎ながら私が本作で感心したのは、すごい美女が3人も登場すること。その1人は宝石職人の妻ハンナ（ミハリーナ・オリシャンスカ）。感染症を予防するためと言われた彼女は、指輪も外してすっ裸になり、大勢の女たちと一緒にシャワー室に入ったが・・・。このハンナは人妻だが、収容所内でサーシャが愛することになる女性は独身の

ルカ（フェリス・ヤンケリ）。そして、私が絶世の美女だと思った、彫りの深い顔の女性が赤毛のセルマ（マリヤ・コジェフニコワ）。手に職を持つセルマは後述する“ゾンダーコマンド”として働くことになったため、シャワー室行きは免れたが、男たちが大脱走を実行しようとする直前、その美貌に目を付けた1人の親衛隊員から乱暴されかかることに。セルマはそれに抵抗することはできないが、脱走を手助けするため豊満な胸の中に隠し持っていた“あるもの”を発見されると、脱走メンバーの1人はついに・・・。

本作には“ホロコस्तもの”には珍しくそんな3人の美女が登場するので、そのセリフは少ないものの、その役割と存在感にも注目！

■□■ゾンダーコマンドとは？その役割は？■□■

ハンガリー映画の『サウルの息子』（15年）（『シネマ37』152頁）はホロコस्तを描く映画の1本。しかし、同作がそれまでのどの作品とも違ってしたのは、“ゾンダーコマンド”の視点から描かれていたためだ。同作ではゾンダーコマンドのことを「ナチスが収容者の中から選抜した死体処理に従事する特殊部隊のこと。」と解説していたが、本作のパンフレットでは、ゾンダーコマンドを「一般囚人からナチ親衛隊が選抜し、わずかに数ヶ月の延命と引き換えに、絶滅収容所に強制移送されてきた他のユダヤ人をガス室へ誘導しガス殺遺体を処理し、その遺品の分類整理を強制された特別労務班員。」と解説している。

『サウルの息子』で描かれた主人公のゾンダーコマンドとしての役割は生々しい死体処理だったから、そこでは口を布で覆って、死体処理に従事する主人公の姿が印象的だった。しかし本作導入部でゾンダーコマンドとして選抜されるのは、ハイム（ファビアン・コチエンツキ）たち、貴金属や羊皮の職人たちだから、「死体処理のゾンダーコマンド」ほどの悲壮感はない。しかし、物語が進んでいくと・・・？

■□■警備は何名で？その厳重さは？脱走計画の内容は？■□■

連合国軍捕虜のナチス・ドイツの収容所からの大量脱出を描いた『大脱走』やステューブ・マックイーンが主演した『パピヨン』（73年）等の脱走モノは面白かったが、そこでは脱走側と警備側の駆け引きが大きなポイントになっていた。収容所の中では何ごととも規則だし、警備も厳しいから、収容者たちは私語を交わすことすら難しいのが常識。そう思っていたが、本作に見るソビボルの収容者には『大脱走』ほどの“自由”は無いものの、前半から中盤にかけてはかなり自由に(?)話し合う余裕があるので、その姿にビックリ！

もっとも、所長のカールは収容所の管理においては冷酷そのものだ。例えば、サーシャの危険性に目を付けたカールが「5分以内で切り株を割らないとここにいる10人に1人を殺す。」と命ずるシーンには驚かされる。また、脱走を試みた数人が失敗し殺されてしまうと、その罪は残った収容者たちも受けるべきだとして、無差別に10人に1人ずつ射殺していくシーンでもその冷酷さには肝を冷やしてしまう。

本作後半でサーシャが立てた脱走計画は、ソビボル収容所を警備する“頭脳部”は13名の将校だけだから、これを1人ずつ殺してしまえば脱出が可能というものだ。実際のソビボル収容所の警備員が何名だったのかは知らないし、本作では監視塔や有刺鉄線やサーチライト等の警備がどうなってるのかは一切明らかにされないのがわからないが、後半からクライマックスにかけて、サーシャたちの計画が次々と実行されていく姿をみると、警備の弱体さが目についてくる。いかにナチス親衛隊員が武器を持っていても、ゾンダーコマンドたちが作った宝石や皮のコートをエサに、1人1人分離して部屋の中に呼び込めば、スキをみて数人でこれを殺害することは十分可能だ。果たして、これが本当に脱走の姿だったの？そんな疑いを持つほど、サーシャたちの脱走計画（警備員殺害計画）は順調に進んでいくので本作ではそれに注目！

■□■大脱走の実態は？その成否は？その評価は？■□■

『大脱走』では、苦労を重ねた末の“穴掘り作戦”が少し不十分だったこともあって、結局多くの脱走者が殺されたり、連れ戻されたりして成功者はごくわずかだったが、さてソビボル蜂起と大脱走の成否は？それについても前述の芝氏の REVIEW を参照してもらいたい。そこで問題は本作クライマックスのスローモーションを多用した大脱出の映像と、REVIEW に書かれているその実態が大きく違っていることだ。スクリーン上で見るような形で門を倒して収容所外へ大量脱出しても、これではその後の逃走はとても無理。ましてや、そのシークエンスの中にサーシャが恋人のルカを胸に抱いて脱走する姿はあまりにも現実とかけ離れているのでは・・・？ちなみに、キネマ旬報9月下旬号“REVIEW 日本映画&外国映画”では、3人の評論家が本作に星2つ、1つ、3つと評価している。そして、そこでは「ラストの噴飯もの大スローモーションによって喪失したものも大きいのでは。」「修羅場となつてからの演出は荒っぽく、最後に男が恋人を抱えて収容所を出る画面など感傷的すぎ。これ、ロシアの国威発揚映画？」と書かれている。残念ながら私もこれに同感で、どう考えても本作のクライマックスはイマイチ・・・？

ちなみに、ソビボル収容所の反乱は、ルトガー・ハウアー主演のテレビムービー『脱走戦線 ソビボルからの脱出』（86年）や2001年のクロード・ランズマン監督のドキュメンタリー映画『ソビブル、1943年10月14日午後4時』でも取り上げられているそうだが、その実態がまだまだ知られていない。それは、収容者が大量に脱出した後ナチスが絶滅収容所の存在を世間に知られることを恐れ、残った者を殺害し、収容所を破壊して無かったことにしてしまったかららしい。

なるほど、本作ではカール・フィレンツェル曹長の厳格さと冷酷さが際立っているうえ、クライマックス直前のナチス親衛隊の若き将校たちの異常とも思える行動も際立っているのでもそれにも注目！ひょっとして、ナチス・ドイツはこんな警備側の汚点（失策）も隠しなかったのかも・・・？

2018（平成30）年9月21日記